

山根幸夫・藤井昇三・中村 義・太田勝洪
編

『近代日中関係史研究入門』

研文出版 一九九二・二刊
B6 四六七頁 四二二〇円

本書は、明治維新前後から現代に至るまでの日中関係史に関する、主に日本と中国での研究動向、そして個々の論文・単行本・史料を、紹介、解説した入門書である。形式的には、『中国史研究入門（山川出版社）』の体裁を継承している。編集は山根幸夫、藤井昇三、中村義、太田勝洪の諸氏が担当され、執筆者の中には日本史研究者も加わっている。

内容面では、まず以下の章だて及びその執筆者を御覧いただきたい（敬称略）。

総説（山根幸夫）第一章 明治維新と日清戦争（中塚明・井上裕正）第二章 辛亥革命前後（中村義・藤井昇三）第三章 第一次世界大戦期（藤井昇三・中村義）第四章 一九二〇年代（白井勝美）第五章 満州事変（安藤正士）第六章 「満州国」（村上勝彦）第七章 台湾植民地支配（若

林正文）第八章 日中戦争（石島紀之）第九章 第二次世界大戦後の日中関係（太田勝洪）第十章 日中文化交流（山根幸夫）／付録（山根幸夫）

この章だてには、年代順配列を原則としながら、「満州国」や台湾植民地支配、日中文化交流等、各時期に解消しきれない問題を、一つの章として独立させたという特徴がある。また、これまで編集されてきた幾つかの日中関係史の文献目録に比べて、本書程豊富な編集・執筆陣による、豊富な内容を盛り込んだ入門書はなかったであろう。更に、「日・中」関係であることの当然の帰結であるかもしれないが、日本史研究者と中国史研究者の研究成果が、意識的に、一つにまとめられている、という点も特徴的な点であろう。章によっては、日本史研究者と中国史研究者が分担執筆している点も注目し値すると思われる。

従来、日中関係史研究は主として日本史の側から研究されてきた。しかし最近、中国近代史研究者の間で日中関係史に対する関心が高まってきており、数多くの成果が発表されている。だが一方、その研究の

ありかたについて問題点も指摘されていた。飯島渉氏は『史学雑誌一九九〇年・回顧と展望』で「対外関係史では日中関係史の成果が目立つが、日本の研究としてその重要性はひとまず了解し得るとしても、何らかの方法的再検討が必要とされる時期に来ていると考える。」と指摘され、その後で広義の外交、交渉に中国がどう対応したかという点について、「政策決定過程の具体的分析を行い得る史料は限られており、中国近代史研究が日本史研究者と共同作業をすることが困難であるとの印象を受けた。」と述べられている。この飯島氏の指摘された現状に対し、本書は、中国側の史料上の制約はさておき、まず日本史研究者、中国史研究者の成果を一つの土俵にのせ、相互に研究の場を引きつけるという意義を持つと思われる。

非常に広い範囲を網羅しようとした入門書なので、中には拾いきれなかった研究成果もあるかもしれない。それは今後の版で補い、いずれは日本、中国以外での研究成果を広く加えた入門書になっていくことを期待してやまない。（川島 真）